

西脇順三郎とピラミッド

加藤 孝男

このほど、詩人で名古屋短期大学教授の太田昌孝氏と共著で「詩人 西脇順三郎 その生涯と作品」(クロスカルチャー出版)を上梓した。「新潟日報」に二〇一四年六月から一年半にわたって連載した内容をまとめたものである。

西脇順三郎生誕百二十年(一四年)の企画がすすむなかで、私と太田氏とは、奇しくもロンドンと新潟という西脇にとって大切な場所に赴任することになった。ロンドンは西脇の留学先であったし、新潟は、詩人の生まれ故郷で



若き日の西脇順三郎
(小千谷市立図書館蔵)

ある。この二つの聖地から詩人の生涯と文学にスポットをあててみたいと思った。そこで私は西脇のロンドン留学について調べていった。すると多くの人間的なエピソードが、このノーベル文学賞候補の詩人にもあることが分かった。

詳しい内容は、この本に譲るが、ここでは西脇が船でイギリスに赴く途中での失敗談

を紹介しておこう。西脇の留学は一九二二(大正十一年)年のことであった。この時代にヨーロッパへ留学した人たちが、エジプトのピラミッドにまで足を延ばしているところ、長年、私は疑問

に思ってきた。たとえば、斎藤茂吉などは、ピラミッドの前でラクダにまたがった写真を残している。港の近くならいざ知らず、ピラミッドは、内陸部の都市カイロの南に位置している。

苦い体験、詩ににじむ

今回、順三郎の留学を調査して、分かったことが、船がスエズ運河を通過する二日間を使ったツアーが存在したのである。スエズ運河

かとう・たかお 歌人、東海学園大学教授。1960年、愛知県岡崎市生まれ。カイロ大客員教授、ロンドン大客員研究員を歴任。88年に「言葉の権力への挑戦」で現代短歌評論賞。歌集に『十九世紀亭』(砂子屋書房)、『曼荼羅華の雨』(書肆侃侃房)、著書に『近代短歌史の研究』(明治書院)など。

は、紅海と地中海を結んでいるが、欧州航路のうちで最も退屈な場所といわれている。そんな退屈な時間を有意義に過ごすというのである。南部兄弟商会による「埃及の首都カイロ市観光」(一九

で、参加者は下船し、汽車でカイロに赴く。カイロで一泊した翌朝、ピラミッドとカイロ市内を車で観光する。市内見物を終えた人たちは、運河の出口の港ポートサイドまでの列車で向かい、ふたたび船に

乗込んだのである。私はたまたまエジプトに滞在した経験があったので、このパンフレットをみたとき、順三郎の詩の一節が理解できたように思えた。

「ピラミッドによりかきり我等は世界中最も美しき黎明の中にねむり込むその間ラクダ使ひは銀貨の音響に興奮する／なんと柔軟にして滑らかな現実であるよ」

これは詩集『Ambarvalia(アムバルヴァリア)』の「風のバラ」という詩の最終部分である。順三郎は、ピラミッド近くでラクダに乗ったのであろう。ところが、下りる時に、ラクダ使ひは多額の金を要求してきた。ラクダの背は高いので一人では下りられないのだ。だから、ろくに値引き交渉もせずに、金を払ってしまった。そのことが、詩の後半部分の皮肉にも近い表現に表れている。

順三郎の向かったロンドンには、欧州航路の終着地点であ

ったため、世界中の港に寄港せねばならなかった。その分、寄港地での観光が可能となり、あたかも世界旅行の趣があった。しかし、国によっても違っていたので戸惑いも多かったに違いない。

順三郎がラクダにまたがった写真は、いまだに発見されていないが、この時の苦い経験がやがて詩を生み出すことになる。しくじりも時には、重要な動機となるのである。

順三郎がラクダにまたがった写真は、いまだに発見されていないが、この時の苦い経験がやがて詩を生み出すことになる。しくじりも時には、重要な動機となるのである。